

広翼の孔雀



〜
※体験版※
〜

「鬼灯様……」

いつも仕事の話しかしない現場監督の獄卒が、麗しい青年鬼に力強く迫る。

「や、やめてください、来ないでください……」

そう言って金棒を振り上げようとするが、いつもの鬼神の力が全く発揮できず、持ち上げることもできない。

鬼灯が焦っている一方で現場監督の獄卒は鬼灯へ一気に近づき、その鬼にしては細い体を強く抱きすくめた。

「あああつ……!」

鬼灯の背中が弓なりに反り返り、顔を苦痛にも似た表情に変え、頭のとっぺんから足のつま先までをブルブルと痙攣させた。

「やっぱり、噂は本当だったんですね……」

獄卒がそう言ってニヤつき、鬼灯の白い耳を舐める。

その感覚に再び体を痙攣させながら、鬼灯は桃の息を吐きながら問うた。

「う、噂、とはっ……?」

「全部終わったら、教えて差し上げますよ……さあ、みんなが帰ってくるまで、時間はあります……俺と愉しんでください」

「い、嫌です、んんっ!んんっ!ああ……っ」

両足の間に足を食い込まされ、一気に膨れ上がった体の快楽に、鬼灯は戸惑いながらも必死にこの状況を打開する策をめぐらせる。

しかし明晰な鬼灯の頭脳も、獄卒のいやらしい手つきで惑わされ、何も考えられなくされてしまう。

「はあ、はあ、ああ……っ」

「すげえエロい・・・そんな声、どこから出してるんですか？鬼灯様・・・」

嘘みてえだ、と付け足し、獄卒は鬼灯の着流しの隙間に手を差し入れ、白い素肌へ直接接触してくる。

（嫌なのに、嫌なのに・・・！）

どうしてこうなってしまったのだろうか？

変化があったのは一週間前。鬼灯の身体から鬼神の力が失われ、代わりに誰の手で愛撫されても感じてしまふようになってしまったのだ。

両足を閉じたたくても鳶に絡まれてほどけず、それどころか、脚に力を籠めると下半身が強く感じてしまい、鬼灯は動くことができなくなってしまう。

鬼灯の感じ方が一気に激しくなったことで、弱点を見つけたと察知したらしい鳶たちは、両足に入る本数をどんどん増やし、鬼灯自身だけではなく陰囊や会陰、秘孔までをヌルヌルと舐ってゆく。

(も、もうだめだ、果てる・・・っ！)

鬼灯の背中がのけ反り、下半身を突き出す艶めかしい恰好を取ると、長襦袢の中で蠢いていた鳶たちが一斉に自身を擦りにかかり、鬼灯は押し流されるかのように達精に至った。

「あぁっ！・・・あ・・・あっあ・・・」

湯の中に勢いよく精を放ち、鬼灯は目を瞑って長いまつげを震わせ、精液を放った。放たれた白い液体が両足の間からこぼれ、ジェットバスの中で泳ぐ。

鬼灯は呼吸困難になりかけたかのように荒い息を吐きながら、枕木に頭をぐったりと預け、それをぼんやりと見つめている。

そして鬼灯は荒く息を吐きながら、先ほどの絶頂の強烈さを訝しんだ。

今迎えた絶頂は、十回の絶頂を一回に凝縮したかと思われるほど激しくて、強力な快感だった。

あまりの強烈さに意識が一瞬白み、鬼灯は絶悦を受け、情けなくも幾人かの獄卒の目の前で恥をさらしてしまった。

(こ、こんな失態、耐えられせんっ……！)

彼らの思惑に乗ってしまったという悔しさと、恥ずべき姿を見られてしまった羞恥、脳神経を焼き尽くすほどの強烈な射精感……さまざまな感情が折り重なって、鬼灯は一瞬混乱状態になったが、獄卒の一人と目が合って、理性を取り戻した。

その獄卒の顔はだらしなくニヤケきり、目だけがギラギラと光を放っていて、実に唾棄すべき姿だったからだ。

妄とした鬼灯の黒瞳に光が戻り、自分を見つめる獄卒たちを睨みつける。しかし、未だに体中をはい回る鳶触手の動きで感じさせられ、苦痛のように顔を歪ませた。

「ううっ……も、もう気が済んだでしょう……いい加減にここから出してください」

「いえいえ、まだお身体の洗浄は終わっていないみたいですよ？」

「何を・・・ああっ！」

開かれた鬼灯の両足の間に、大人の腕の太さほどある鳶触手が食い込んでくる。鬼灯の白い双丘の間を通り、会陰、陰囊、自身の裏筋を擦って、鬼灯を快楽で黙らせた。

(こ、こんな恥ずかしい姿・・・！)

ジェットバスの泡立つ湯で、鬼灯の股に食い込む触手はほとんど見えないが、鬼灯からそれはわからない。弱点の全てを押さえられた責めの恰好に、鬼灯は激しい羞恥と、なぜか胸の高鳴りを感じていた。

「鬼灯様、まだまだ身体を洗浄してさしあげますね・・・もう俺たち以外に浴場に入ってくるヤツはいませんから、存分に堪能なさってください」

しらじらしくも言う獄卒を睨みつけるが、食い込んだ触手が前後に擦れるとたちまちその瞳は蕩けた。触手と鬼灯の接触部分には細かい繊毛が生えそろい、それが動くとき、裏面が鋭敏な性感帯をザリザリと柔らかく撫で、振じられると、つるりとした表面の部分がヌルヌルと責める。

激しい感覚と力が抜けそうな感覚の両方にせめぎたてられ、鬼灯は両足をビクビクと痙攣させる。食い込んだ触手にズルズルと擦り上げられると、身体が勝手に反応して痙攣し、はしたない声も止められなかった。

「あああつ！こ、こんな、こと、あああつ！や、止め・・・！んんんんっ！」

触手が鬼灯の両足の間にしっかりと食い込み、その身を振じらせながら前後にザリザリ、ヌルヌルと動く。ぞくん、ぞくん、と涎が出そうな快楽が鬼灯の下半身に溜まり、身体の芯をたちまち熱くさせる。先ほどあれだけ激しく絶頂しておきながら、鬼灯の身体は再び射精への縄を掴み、予想外の速さで上り詰めてゆく。

「んっ、あつ！あつあああつ！ああ、はああああつ！」

鬼灯の身悶えと連動して触手の前後運動も早くなり、高速で鬼灯自身を引きずりまわす。あまりの快感に鬼灯は獄卒たちに見られていることも忘れ、悶え狂い、嬌声を放ち続けた。

「あぁっ！あぁっ！っ——っ！」

再び自身から白液が吐き出され、鬼灯の身体全体が硬直し、ブルブルと痙攣する。絶対的な性の絶頂快楽に両目を固く瞑り、奥歯を噛み締めて耐える。

最初の絶頂よりもより強力な快感が押し寄せ、鬼灯は意識を飛ばしてしまった。だが、ガクリと横に垂れた顔に湯がかかり、すぐにぼーっとした頭で意識を取り戻させられる。しかし鬼灯への責めは終わっていない。

敏感な性感帯を遠慮なく扱かれ、すぐにでも果ててしまいそうだが、さらに両胸の突起にも糸状の触手が巻き付き、ひっぱったり擦りまわしたり、様々な刺激を送り込んでくる。

「あっ、あっ、あぁ、あぁあっ・・・！」

鬼灯はすでに声をあげてしまうことを諦め、妖艶な嬌声を紅い唇からこぼし続ける。

ずるずると擦られる片方の突起と、糸状に責められる突起と言う、異なった快感に鬼灯の身体は追い詰められ、何故か廁で犯された時よりも敏感になっている胸で、最上の絶頂を迎えてしまう。

「うっ——！」

拘束された上半身を遮り無二動かし、必死に襲い来る快感に耐える。

その姿の艶やかさ、淫靡さ、どれをとっても周囲の獄卒たちの食指をそそののに十分な材料だった。

胸と同時に下半身でも絶頂し、意識が途切れるほどの快感が津波のようにと襲い来る。さすがに三連続の深い射精に鬼灯は意識を失い、瞳を閉じて首を横に倒した。しかしすぐに獄卒に湯をかけられ、無理矢理意識を取り戻させられてしまう。

「んむっ……ん、んぐっ……！」

鬼灯の小さな唇にホースのような太さの触手が入り込み、鬼灯の口腔までも蹂躪する。

下半身の触手の動きも相変わらず激しく、鬼灯は腰の奥で灼熱を感じながら、流されるがままに絶頂するしか手段がない。

地獄の鬼は絶倫だ。普通の人間ならば一、二回で終わってしまう射精も勃起も、刺激され続ける限り延々と続く。

鬼神の剛力はなくしても、体力は健在である鬼灯にとって、甘い拷問の始まりだった。

周囲の獄卒たちは、さらに目に劣情の炎をともして、美しく身もだえる鬼に魅入り続けた。

(こんな、生殺しです・・・)

獄卒たちのじれったい愛撫に鬼灯の身体が焦がれ、知らず身体が妖しくくねる。いつもならば強靱な精神力で快感に流されまいと抵抗するというのに、今の鬼灯は快感が欲しくて抗うことすら忘れていた。

両膝を掴まれてM字にされ、いつもは秘められた箇所がすべて露にされる羞恥の恰好を取らされてしまう。鬼灯の白い臀部が露にされ、その張り具合と瑞々しさに、獄卒たちは息をのむ。

「美しいお尻だ・・・女でも、こんなに綺麗なのはそうありませんよ」

獄卒の数本の腕が白い臀部に襲い掛かり、好き勝手に撫でまわし、揉みし抱き始める。

鬼灯の臀部は肌のキメも細かく、張りも十分に弾力があり、まさに絶妙の美尻と言えた。

「んぐっ・・・はあ、はあ、ああ・・・」

ひとしきり臀部の感触を楽しんだ獄卒たちは、その白い双丘を左右に押し広げ、最も秘めた部分を白日の下にさらしてゆく。

「やっ・・・いやだ・・・！」

秘孔をみられているという羞恥が鬼灯を若干正気づかせ、嫌がる意思をしめすものの、その程度で獄卒たちが止めるはずもない。

「へへ・・・ピンクで、ちっさくて・・・こんなところまで愛らしいですね・・・」

とうとう獄卒の指が秘孔に触れ、その瞬間、我慢できないほどのゾクゾクとした快感が訪れ、鬼灯は体中を痙攣させてその愉悦に耐えた。

（そんな、触れられただけで、こんなにも身体が・・・！）

敏感すぎる箇所とはいえ、たったこれだけの刺激でこんなにも感じてしまうなど全くの予想外で、鬼灯は焦りを感じたが、次々に撫でまわされる快感に思考を寸断されてしまう。

「はうっ・・・うう・・・ん、んあ、やっ・・・あっあ・・・」

ミストで濡らした指先を使って、上下に擦ったり、浅く突き入れたりされるだけで、鬼灯の口からあられもない声がこぼれる。

そんな鬼灯の声を耳に入れ続け、獄卒たちの理性もどんどん擦り切れてゆく。

指は一人の獄卒がずっと弄んでいるのではなく、かわるがわる挿入して楽しんでいるようだった。

ある指は細長くて深い部分までを犯し、ある指は太く、ゴリゴリと前立腺を激しく擦り立ててくる。そのどれもが鬼灯に気が遠くなる快感を与える玩具となり、絶頂に至る快楽を突き付けてくる。

(も、もう指だけで果てそうだ・・・まだ、やるのかっ・・・！)

はあはあ、と荒い息をこぼし、鬼灯が憂慮した次の瞬間、明らかに指ではないヌルついた感触が秘孔に当てられた。

その感触にゾクゾクと背筋をのけぞらせ、鬼灯は一層派手に身もだえる。

「あっ・・・ああ、あああっ・・・！」

(こ、これは、舌・・・？嫌だ、そんなところ、舐めるな・・・)

しかし身体はすでに快楽に没落しており、鬼灯の意思とは無関係に快楽を食うようになってしまっている。

舌のヌクヌクとした動きとヌメる感触が鋭敏な内壁にまで及び、鬼灯はさらに高い声で喘いだ。

「あああああっ！」

「ふふ、鬼灯様、舌で舐められて随分よがっていらっしやいますね……」

「指で触れられるのも敏感でしたが、舌とか歯になると反応が変わるんだよな……ほんと、いいぜ……」

もう犯す意図を隠しもせずに獄卒たちが顔を見合わせて話し合う。

まさかこんな展開になるとは思いもよらなかった鬼灯は、耳半分で彼らの囁きを聞いて、絶望的な気分になった。

一人二人の獄卒ならばなんとかこなせる。

しかし、今は5、6人の獄卒に囲まれ、さらに就業中ではなく、朝まで人が来ない場所での凌辱だ。

たまった仕事を消化したいというのに、こんな場所でなんと無駄なことをしているのだろう、と鬼灯の心の底は冷めた目で自分の状況を観察している。しかし、表面の鬼灯は、これから複数の獄卒たちに犯されるといふ事実には、信じがたいことだが、期待を感じてしまっていた。

(そんな、どうしてそんなに嫌じゃないんだ？こんなもの、嫌でしょうがないハズなのに・・・)

自分の心境の変化に戸惑いながら、鬼灯は舌の動きに翻弄され、動きの通りに喘ぎ、身体をのけぞらせる。

舌で鬼灯を味わっていた獄卒は、一通り味わうと舌を離し、鬼灯を快感から解放した。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

まだ凌辱は始まっていないのに、鬼灯はすでに輪姦されたような被虐感が漂っていた。その退廃的な雰囲気と絶世の色香に、獄卒たちは生唾を飲む。

「鬼灯様・・・このミスト、俺たちも吸ってるんですよ・・・」

「ああ、俺たちもギンギンでたまりません」

「鬼灯様も、中途半端はお嫌でしょう？このまま、俺たちと朝まで相手してくださいね・・・」

とうとう処刑宣告を下され、鬼灯は絶望感を背負いながら、期待通りの展開に胸の内がドクンと脈打つのも感じた。

「い、嫌です！やめてください、私があなたたちの相手をするいわれなど・・・！」

「でも、もう俺たちのこんなになっちゃっているんですよね」

そう言って獄卒の一人が、すでにぐったりとしている鬼灯の目の前に逞しい剛直を突き出してくる。

その表面には幾筋も太い血管が走り、見ただけで硬そうで、すぐにでも暴発しそうだった。

目の前に雄の象徴である器官を突き付けられ、鬼灯の胸がまた一段、高鳴る。

(そんな、私は望んでなど、こんなこと・・・！)

「んぐっ！んっ！んんっ！」

一人の獄卒が鬼灯の両足の間に入り込み、取り出した剛直で鬼灯自身をゆるゆると擦る。それだけで灼けつきそうなほどの熱さと快感が下半身を駆け抜け、鬼灯は体を痙攣させた。

「それじゃあ、鬼灯様もお待ちかねのようですし、挿入させていただきますよ……」

「や、嫌だっ……！」

しかし、本気で嫌がっているならば力づくでも振りほどくことができると思っている獄卒たちは、鬼灯の言葉など耳に入っていないかった。

媚薬入りのミストを吸って興奮が最高潮に上がり、最高の獲物が目の前にいるのに、引き下がってなどいる必要はない。

鬼灯の秘孔に剛直の先端があてがわれ、そのまま腰を落とされて洞内へとゆっくり侵入してゆく。

「あああっ！あっ！あああああ！」

「よし、替われ！」

鬼灯自身を吸い上げていた獄卒が入れ替わり、今度は柔らかく歯を立てて上下に扱き始める。

「あぐううっ！んううっ！んあ、あっあああっ！」

（そ、それはキツイ・・・！）

これまでの愛撫でひどく鋭敏になった性感帯を激しく扱かれ、キンキンと鋭い快感が鬼灯の腰奥を打ち、白い喉から哀れっぽい艶声をあげさせる。

その下でもう一人の獄卒が秘孔に舌を突き入れ、グチユグチユといやらしい音を立てながら浅い内部を攪拌している。

「んんんっ！んぐっ！うあっあああっ！はあ、も、やめろっ・・・！」

鬼灯の身体が断続的に痙攣し、強い快感を訴えるしぐさを現す。それを見て、誰もが絶頂に近いのだと感じ取り、獄卒たちはさらに劣情を燃え上がらせた。

「おい、次は俺だ！」

絶頂寸前で次の獄卒に変わられ、じれったい思いを感じながら、新たな動きをする愛撫を受ける。尖った舌で先端をチロチロと舐められ、針のような鋭い快感が自身を何度も走り抜け、鬼灯の反抗心を削ってゆく。

「あああつ！あつ！あつ！やめ、ああ、ああああつ！」

同時に秘孔も激しい調子でしゃぶりまわされ、下半身の性感帯二箇所を同時責めされ、さすがの鬼灯も快楽の悲鳴を上げずにはいられない。

「ダラダラ先走りが垂れて来てるぜ！エロい身体だなあ！おら、次だ！」

そう言って鬼灯の性感帯はまた別の獄卒に廻られ始める。

「くあっ・・・！ああ、あああああ！」

壮絶な舌輪姦に身体を見悶えさせ、気持ちいいのに絶頂させられない状態を続けられ、鬼灯の身体は最高潮に昂っていた。

「ほらほら、こっちも忘れないくださいよ！」

「あうっ、ううっ、くあああああ！」

秘孔を探る獄卒の舌の動きも激しく、舌なめずりの音を立てて内部へ侵入し、浅い部分を舐め削るように激しくしゃぶり回す。

（うううっ！激しい、そこはっ・・・！ああ、いけない、もうこれ以上舌を突き立てるなあ！）

中を抉る舌が、あと数センチ伸び、洞内を舐めまわせば、前立腺に当たってしまう。その感覚は今の鬼灯なら身も世もなく快楽に狂ってしまうほどの快楽で、それが与えられないことに安堵しながらも、じれったい思いが心の奥底にくすぶり続けている。

(もつと奥深くまで・・・)

再び沸き上がった鬼灯の理性に反する、快楽を強請る言葉だったが、頭を激しく左右に振ってかろうじて霧散させた。

(こいつらの好きにさせるかっ・・・!)

これ以上舌が入り込まないように、鬼灯は下腹に力を込めて必死に洞内を引き締め、舌がこれ以上深くまで突き入らないように耐える。

「ほらほら鬼灯様・・・強情を張っていないで、身体のを緩めてくださいよ・・・」

「チンポ気持ちいいでしょ？」

秘孔に力を入れれば下半身がそれに比例して感じてしまい、快感を逃すことができない。そんな中で絶頂寸前の自身を何枚もの舌で舐めまわされ、鬼灯の身体が快感でどんどん緩んでいく。

「うっ・・・ああ、あつ！あああ・・・！」

身体が緩んだ隙を逃さず、秘孔を翳っていた獄卒の舌が奥深くまで入り込み、とうとう前立腺まで到達する。舌先がその部分に触れた瞬間、涎が出そうなほどの悦楽が鬼灯の腰に重くのしかかった。

「あっあああ・・・！」

大きくのけ反った鬼灯の身体を見て獄卒たちは快哉を叫び、その身もだえる妖艶な姿にますます欲情の火を強めていく。

「へへ、気持ちいいところに当たったかな？」

「そろそろチンポもイカせてやろうか・・・後ろと同時に・・・いけるか？」

「さあ、どうかなあ・・・？」

はあはあ、と荒い息を吐いて悦楽を必死に逃がそうとする鬼灯だったが、もうその程度では身体で受ける悦楽を受け流すことはできない。

一方的に悦楽を高められ、高められるまま絶頂へと昇らされてしまう。

「くあっ・・・ああ、あああっ！あ、ああああっ・・・！」

「鬼灯様気持ちいいですね・・・いい声してますよ？お顔も、超エロですよ・・・」

鬼灯の紅潮した頬に舌を這わせ、獄卒が楽しそうに話しかける。

「んうううっ！げ、下種・・・っ」

この期に及んで獄卒たちを罵倒できる精神力は天晴だが、快感は待ってくれなかった。

自身の先端を強力に吸引され、どこまでも突き抜けていくような快感が生じ、鬼灯はあえなく射精絶頂を迎えてしまう。

舌輪姦で高めに高められた絶頂は強絶で、鬼灯は何も考えられず、ただ体を強く緊張させ、激しくのけ反らせて先端から白液を勢いよく吐き出す。

「んんんんっ！」

自身が絶頂したことで舌責めにあっている洞内を強く締め付けてしまい、前立腺が激しく刺激され、そこでも鬼灯は言葉にならない愉悦を食った。

「んっあああ！熱い、あああああ！」

絶頂ではないが、それでも強く刺激されれば感じてしまう前立腺に容赦ない刺激を与えられ、鬼灯の口から喜悅の音が放たれる。

ようやく開かれた鬼灯の両足から獄卒たちが去り、舌と指で荒らされ放題だった下半身を解放される。隙あらば逃げ出そうと、鬼灯は常に腕へ力を込めているが、激しい射精絶頂で、腕へ通る力も萎えてしま

う。

「そろそろ、俺たちも限界だなあ……」

「鬼灯様、十分気持ちよくなったでしょ？次は俺たちの番です……」

「はあ、はあ、はあ、ああ……や、やめろ……」

んなやり取りが鬼灯を挟んで交わされていたが、顔を覆っても声はすでに覚え済みだ。解放されたら、虱潰しに探してこいつらを解雇させてやる。

しかし、それは解放されてからの話だ。このままこの場にいる者たちに凌辱されて、そのまま帰されればいいが、監禁となると最低六日はこのままと言うことになる。

(こ、こんなヤツらにいいようになど、されたくありません・・・！)

しかし下半身の快感には抗えず、鬼灯は激しい絶頂に細顎を反らせて快楽を極めた。

「あぁっ・・・あぁあぁ・・・！」

その瞬間、目隠しを取られて顔の表情を晒されてしまう。

絶頂が終わって肩で息をしながら周囲を見回すと、面をかぶった三人の男たちが鬼灯の表情に魅入っている。

『イキ顔エロかったー』

『気持ちよさそうな顔して・・・エロいなあ』

『今度は俺が、イカせてやりたいぜ・・・』

獄卒たちが如何わしい思考を流し、鬼灯の意に添わず、どんどん身体の欲情が深まってくる。先ほど精を放ったばかりだというのに、もう身体が熱くなって、すぐにでも身体にふれてほしくてたまらなくなる。

ローションに濡れた鬼灯の胸の突起を獄卒の指が滑り、息をのむほどの快感が走り抜ける。

「その顔、お可愛いですね・・・」

感じている顔をこんなヤツらに見られていること自体屈辱だ。

鬼灯は一瞬、胸にふれていた獄卒に睨みを利かせるが、次に突起を弾かれた瞬間、全ての意識は霧散した。

それを皮切りに、獄卒全員が鬼灯の身体に触れ始めてくる。

四人の面をかぶった獄卒が鬼灯の瑞々しい白肌を撫でまわし、摘まみ上げ、擦り捲る。

「あぐっ・・・！あっ！・・・ああ・・・！」

体中で弾ける快感に、鬼灯は流されるままだ。そして、鬼灯の中に湧き上がってくる忌々しい感情、それは認めたくないが、「歓喜」に近かった。

こんな卑怯な方法で身体を凌辱されているのに、感じてしまう自分が浅ましくて情けない。

「ふふ、鬼灯様の誰にも見られていないところが丸見えですよ・・・ああ、昨日見たんだっけ」

ㄣ字開脚のまま上半身を倒され、膝をあげられて臀部が突き出る恰好にされてしまう。

鬼灯の秘めた部分がすべてさらけ出され、軽い羞恥を共に鬼灯は両足を動ける範囲で暴れさせた。

「全く、そんなことしても無駄なのに・・・」

そう言って獄卒の一人レバーを操作すると、両足首と太ももに巻かれたラバーの拘束具が引つ張り上げられ、抵抗することもかなわない。

ㄣ字どころかマンぐり返しの態勢にされ、鬼灯はさらに追い詰められる切迫感を感じた。

そして鬼灯は、薄暗い室内で怪しく光る物体を目にした。レンズだ。気が付くと、一台のカメラが自分の全貌をとらえる位置に置かれている。

「あ、あれはっ……!!」

焦った鬼灯はなんとか体勢を取り繕おうとしたが、縛られている拘束はびくともせず、ただいたずらに鎖を鳴らすだけだった。

「ああ、今生放送してるんですよ……結構視聴者多いですよ、何の宣伝もうってないのに、現在視聴者数3800人……」

「なっ……!!」

それを聞いた瞬間、鬼灯の身体の底から灼熱の欲情が突き上げられた。五人に欲情の目をむけられているだけで動けなくなるほど身体が欲情してしまうのに、同時に3800人という途方もない人数にみられている、欲情が皮膚を突き破って暴れくるうほどの衝撃が性感帯を打撃する。

「コメントみましょうか？」

そう言われて目の前にタブレットを突き付けられ、鬼灯は恐る恐る画面に目を落とす。

左端に寄せられた薄暗い小さな画面の中に、あらゆるもない恰好をさせられてタブレットに顔を落としている自分の姿がある。そして、その画面の左には様々なコメントがあわただしく流れて消えてゆく。

『マジで鬼灯様かよ?』

『エロ!』

『ちゃんとこっちに顔を見せて、はっきりさせろよ』

『もっとエロい道具とか使って責めろ』

『偽物だろう、本物なわけねえ』

『かわええなあー鬼灯様・・・』

そんな中、色彩の枠がついたコメントが流れる。

『道具つかって!』

コメントの上には「¥300」と表記された数字がながれ、その数字だけコメント欄の上部にとどまり続ける。

他にも、100、400、と言った数字が並び、様々な色合いで表記されている。

「お駄賃入りました・・・」

「課金して下さったんですから、期待には応えないといけませんよね」

ようやく動画のシステムがわかった鬼灯は、自分の凌辱劇が売り買いされている現状に激しく立腹した。こんなことをして金をかせぐこいつらもこいつらだが、こんな動画を見て課金する輩もどうかしている、と鬼灯は胸を熱くさせ、拘束からのがれようと一層激しく暴れくるった。

「この変態どもっ・・・！こんな方法で金稼ぎなど、許せません！」

「まあまあ、鬼灯様、そう言わずにこの状況を愉しましよようよ・・・」

「俺たちは金が入るし、鬼灯様も気持ちよくなれる、動画の視聴者も楽しめる。ウインウインってヤツですよ」

「な、なにがウインウインかつ・・・！この、いい加減にほどけっ・・・！」

いつまでも暴れ続ける鬼灯にそろそろいらだってきたのか、一人の獄卒が両足の間に歩み寄り、半分反応しかけている鬼灯自身を強く握りしめた。

「あぐうううっ！」

「おとなしくしてくれませんかねえ……俺たちは今、あんたを気持ちよくもできるけど、痛くすることもできるんだぜ……？」

脅し文句とは裏腹に、妖しい指の動きで鬼灯自身を撫で回し、快楽で鬼灯の動きを封じ込める。

「んくっ、んんっ……！ひ、卑怯、者……っ」

しかし暴れる鬼灯の身体は静かになり、自身に走る甘美な愉悦と、四千人近い者たちに見られている状況で、指先が痺れるほどの激しい欲情に声を弱まらせた。

「まずはこれを使いましょうか」

なおもしつこく聞いてくる獄卒に普段なら殴打の一つも入れているところだが、快樂で体力を使っている鬼灯には叶うことは無い。

「はあ、はあ、ああっ……！大王の、秘密などっ……！」

鬼灯の喘ぐ姿を見て獄卒も視聴者も興奮の度合いを上げてゆく。

『どうでもいいから仕置きしろよ』

『もっと気持ちよく！』

『エロいこともっとしてください』

『本物かどうか、どうでもいいわ』

コメントでは、鬼灯の真偽よりも、映っている鬼灯がどれだけ乱れるかを皆は期待し始めていた。

「へへっ、じゃあ、答えられなかった罰を受けてもらいましょうか」

獄卒も早く鬼灯を責めたくて仕方なかったのだろう。

三角木馬に近づき、再び怪しげなボタンを押した。

すると鬼灯自身に密着していた専用のローラーが動き出し、下から上へと鬼灯自身を刺激し始めた。

「ああああっ・・・！」

これまでわずかな快感を与えられはしたが、決定的な刺激にかけていた自身に、強烈な擦り込みが与えられ、一気に快感が上昇する。

ザリザリとした感覚があったかと思えば、人間の舌のような感覚もあり、痛みにすりかわるギリギリの激感を与えてくる棘の物もあった。

様々な刺激が鬼灯自身を襲い、快楽に慣れさせることを許さない。

「んああっ！あっ！あっ！あああっ！あっ！」

『すげえエロい声』

『かーわいい』

『エロいマシーンだな』

『もっと責めてやれ』

『どれぐらい気持ちいいんだ？』

読み上げられる視聴者の勝手なコメントなど耳に入らず、鬼灯は下半身で巻き起こる快感に背中を反らせて、首元から汗を流し、甘美な快感を享受する。

「どうです？閻魔王様の秘密は言う気になりましたか？」

そう言いながら獄卒はローラーに媚薬を垂らし、さらに鬼灯を快樂で追い詰める。そのせいでぬるぬるとした感覚が新たに追加され、鬼灯はその甘美な愉悅に声を蕩けさせた。

「あぁっ・・・はぁ、あぁ・・・んううう・・・！」

腰から背筋にかけてゾクンゾクンと快感がせりあがり、あまりの愉悅に鬼灯の表情も淫蕩に揺れる。その様を見て周囲の獄卒たちもゴクリと喉を鳴らし、鬼灯への欲情を強めていった。

「なんだか気持ちよさそうですね、これじゃ尋問にならないなあ・・・じゃあ・・・」

獄卒が三角木馬に近づき、その手に電マを持っている。木馬のそばでしゃがむと、鬼灯を見上げて言った。

「鬼灯様、エネマと会陰の突起、木馬の中で繋がってるってご存知でしたか？まあ知らないでしょうね・・・。その繋がっている部分を、電マで刺激したらどうなるでしょうね・・・」

「くああ・・・っげ、下種っ・・・！やめろ・・・っ」

挿入されているだけでジンジンと快感が生じている部分を、振動で責められてはたまらない。しかし、獄卒は容赦なく電マをあてがった。

ヴヴヴヴヴヴ・・・

「んぐうううううっ！」

鬼灯の中に侵入している淫具が小刻みに振動し、それが会陰にも伝わって、頭が真っ白になる淫撃となる。啜えられている前立腺が、内と外から激しく揺さぶられ、一気に身体で感じる快感が激しくなり、鬼灯は背中を弓なりに反らせて激しく身もだえた。

「んぐうううううううっ！うあ、あああああああ！」

鬼灯が黒髪から伝う精液を振り落としながら激しく身もだえ、獄卒は両足を縛っている鎖をさらに引いて木馬の食い込みを強くする。

会陰にかかる刺激が増大し、そちらでも鬼灯は快感に翻弄されなくてはならない。

「ああっ！あっ！あああああ……っ！」

鬼灯の白い体が一瞬激しく痙攣したかと思うと、次の瞬間には激しく硬直し、ブルブルと体を震わせた。

「あっ……ああ……はあ……ああ……」

あえなく肛悦絶頂を迎えてしまった鬼灯は、身も心も蕩ける愉悦に頭までつかり、なにも考えられなくなってしまう。

（気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい……っ）

こんな淫拷問をされて気持ちいいと思うなど屈辱の極みだったが、絶頂で何も考えられなくなってしまうた鬼灯は、素直に身体で感じる快感を受け止めていた。

最初屈辱を受けていた時は反抗心で胸がいっぱいだったが、数々の淫拷問を受けて、鬼灯の身体は快楽を受け入れようとしている。

驚異的な精神力で押さえて入るものの、鬼灯の身体はもともと快楽に弱くできている。

その弱点で責められ、受ける快感は常人の二倍も三倍も感じるのに、鬼灯は耐えきってしまふ。しかし、今は二万という途方もない人数に欲情の目を向けられ、体中が我慢できないほど発情し、次々と繰り出される快楽の責めに、鬼灯の意識は性の愉悦に陥落しつつあった。

「じゃあ、鬼灯様はそのまま休憩させてあげますよ。俺たちも休憩します」

(こ、こんな状態で放置されるのか！)

今受けている激しい責めのまま放置されるなど、このまま連続絶頂に陥れと言うことを意味することになる。それほどまでに鬼灯の身体は高められ、極限の快楽を受けていた。

「はあ、はあ、う、動き、止めてくださいっ……！」

こんな奴らに乞いたくはないが、鬼灯はやむを得ず、我ながら弱弱しい声で訴えた。しかし、当然そんな願いなど聞く獄卒たちではない。

「ん？刺激が足りないんですか？しょうがないなあ」

そういうとローターを二つ取り出し、快楽で尖り切った胸の突起の両方に当てる。

「んあああああつ！」

下半身だけでも十分な快楽が上半身にも与えられ、鬼灯は背をのけ反らせて激しい反応を示す。

「いや、いやだ、やめろ、ああ、あああつ！あああああつ！」

「くく、鬼灯様、暴れると余計に気持ちよくなってしまいますよ？」

「それとも気持ちよくなりたいんですかー？」

上半身の快楽から逃れようと体を動かすと、下半身を責めている木馬がさらに食い込んで、責められている性感帯をさらに激しく責めたてる結果になってしまう。

鬼灯もそれは理解しているが、与えられる快感には反射的に反応してしまう身体を、止めることはできなかった。

「んんん——っ！んんっ！んああああっ！」

胸を責められて身もだえる鬼灯を楽しそうに見つめながら、獄卒たちは医療用テープを取り出し、二つのローターをそれぞれ左右の突起の上に張り付ける。

上からテープでローターを強く押さえつけられ、振動の逃げ場がなくなり、全ての刺激が鬼灯の身体を打ち始める。

「ふあっ！や、あっああっ！あああっ！と、とって下さ・・・あああっ！」

下半身でギリギリの快感を強いられ、さらに上半身にも延々と続く快楽を与えられ続け、鬼灯は身も世もなく黒髪を振り乱し、喘ぎながら獄卒たちに声を上げる。

だが獄卒たちはそんな鬼灯を一步離れた位置から眺めるだけで、嫌らしい笑みを浮かべ続ける。一人の獄卒が近づくと、鬼灯の身体には一切触れず、様々な角度でカメラを向けはじめた。

続きは製品版でお楽しみください。